

「神父さん、この本読んでみない？」と小学五年生の女の子から一冊の本を紹介された。タイトルは「ブッタとシッタカブッタ2」そのまんまではないよ』（メディアフアクトリー刊）。著者は小泉吉宏氏で四十四歳。筆者と同じ年▼この本はマンガ。たくさんの悩めるブッタが登場する。「ブッタとシッタカブッタ」は「ブッタ」をもじった登場人（？）物。内容はきわめてマツメなもの、人生を生きやすくするヒントが書かれている▼ボクを救ってくれるのは恋？ お金？ 宗教？ それともブッタ様？／へ自分／とかへ心／というものを一度見つめて直してみよう／みんな何を大事にしているんだろう／へただの自分／を見つけると人は抱のずと内側から変わってしまう／あたりまえのことがよく見えないんだね／4つのあたりまえ①すべてのものは移りかわる②すべてのものはひとりでは存在しない③人生は人の意志を超えている④欲にくらまされなければ心はおちつく／そのまんまではないよ／へそのまんまではないよを言いわけにするなよ／人間だけが「そのまんま」を忘れて生きていく▼引用が長すぎたが、見出しを見るだけで内容の見当はつく。へそのまんままでいくといふことがすべての出発点、といふことに共感する。それにして「いい本」といって紹介してくれた女の子もすいと思うが、その女の子に分かるように「人生」を説いた著者もすい。キリストの教えも、このように青少年に分かる言葉に翻訳できたらすばらしいのに、と思ふ。 (Y)

求道者がミサに参加している。聖体拝領が始まる。教会に導き、求道者の世話をしている信徒が隣の席で言う。「ちょっと（こ）で待ってね」。彼女は求道者を席に残して聖体拝領の列に加わる▼「さあ、一緒に行きましょう」と言われたらどんなにうれいことか。先の言葉と後の言葉の違い、これは大きい。もちろん、洗礼を受けていなければ聖体拝領はできない。しかし、信徒と共に聖体拝領の列に加わり、共に祭壇に進み、ご聖体のイエスに近づき、祝福を受けることはできる。祝福に誘われ、祝福を受けることは未洗者にとつて大変喜ばしいことだと聞く▼イエスの時代、まづイエスが呼びかけ、人々はそれにこたえ、イエスに近づいた。そこから神との出会いは始まり、それが神との交わりに発展していく。この、イエスに近づく人々の姿と、聖体拝領の列に加わる求道者、未洗者の姿が重なって見える。聖体拝領ができなくても、信徒と共に主に近づくと、教会の、交わりとしての教会の本来の姿が表れる▼「受け入れる」と「受け入れられる」、「呼びかける」と「こたえる」の両方がある。「交わり」が成り立つ。ミサは「交わり」である。神との「交わり」を体験できる（こ）に喜びがある。その喜びを体験するためにも、「隣の人」は「待ってね」と言わずに、「一緒に行きましょう」と勧めるのがよい。せつかく教会に導いたのに、肝心なところで止まっている。もう一歩近づけば、神との交わりができる。それが、洗礼、さらには聖体拝領につながることになる。 (Y)

教会学校で日本二十六聖人の話をした。「信仰を捨てて私の子どもにならないか、と言われたらどうする？」一人の子が「ぼくは絶対に武士の子になる」と答えた。別の子が「武士になっても道端で殺されてしまうじゃないか」と言う、その子は「そうだね。それだったら神さまのために死んだほうがいいね。十字架のほうがいい」と言った▼同じ子どもたちに絵をかいてもらった。行列する二十六聖人の顔はどれも喜びの表情に満ちている。とりわけ三人の少年殉教者の十字架上の顔はほほえみさきさき浮かべている。「神様に会える。うれしい」というコメントを絵に付けた子どももいた▼感想文。「よく長崎までがんばったなあと思いました。十二歳の子は最後まで他の人と助け合って、みんなといっしょになって止まらなりました。本当にえらいなあと思いました」。「ぼくが二十六聖人の立場だったらすぐに信者をやめてしまおうけど、二十六聖人は殺されるまでキリスト教を信じていたから二十六聖人の勇氣に驚いた」▼堅信の準備をしている。保護者からクレームがついた。「何もこんな時期にしないで。受験や学年末で、ただでさえ忙しいのに」。堅信準備クラスの一、日黙想会を計画して案内を出した。黙想会の翌日から学年末の試験が始まる子が数名いた。どうにかできないか、と親から要望があった。心配した。「大丈夫です。勉強の方も今からそのつも準備しておけばいいから」。その数名の受堅有はさりげなくこたえてくれた▼子どもたちは大丈夫。大人たちがしっかしなければ…。 (Y)

最近、星を見ることがあります。余裕のない毎日。少しでも前進しようと思はかり見ている毎日。立ち止まることもなく、後ろを振り返ることもなく、時間に追われる毎日。最近、星を見たことがありませんか。それはいつですか。どんな時でしたか。何を感じましたか▼立ち止まり、上を見る。数えきれない星のまばたきを見つめながら、今、この地球の上に立つ自分を見る。小さな地球、その上に立つ小さな自分。悠久の昔から続く生命の流れの中に自分が在る。時の流れの小さな小さな一点にすぎない自分▼ときどき立ち止まり、上を見るのはよい。あくせく動きすぎる自分に気づかされる。小さなことにこだわっている自分に気づかされる。道を誤っている自分に気づかされる▼がむしやらに走りまわり、意見の対立があればそれに拍車をかけ、不正義で正義を抑えつけ、さまざまに争い油を注ぐ。孤独の中で子どもたちは氣力を失い、モノに埋もれて飽かされている。大人は、とはいえ、相変わらず金、モノ、名誉を得るために躍起になっている▼みんなが立ち止まって空を見上げればよい。太陽の光を顔面にいっぱい浴び、空の青さに感動すればいいのに。夜空にまたたく無数の星を見ればよい。自分の小ささを認め、また他人も小さく弱いものであることに気づけばいいのに。互いに見つめ合い、話し合いながら時は進んでいく。共に立ち止まり、共に星空を眺めれば自然と手がつながる。今年もまた、死を思う月がやってくる。 (Y)

落ち込む時がある。なんとなく、理由もわからずにやる気がなくなる。いろんなことをして立ち上がるつもりでも氣力が足りない。まるで背中に吸盤がついているように、床から起き上がれない▼そんな時にかきこいて電話がかかってくる。「神父さん、きょう会っていただけませんか。話を聞いてほしいんです」。これは断ることができない▼二十一歳の青年。両親の不仲に悩んでいる。相談する相手がいない。ミサには参加するが、そのほかに教会での出会いの場がない▼五十一歳の父親。小さな会社を経営している。兄弟の不仲に悩む。金もつけ主義に嫌気がさしている。人間関係に悩み、脱サラを望む。たまにミサに参加するが、そこから力を得ることができない。洗礼の準備の時に聞いた「み言葉」が今でも生きる支えになっている。要理の勉強をもう一度やり直してみたいと望んでいる。一緒に飲みながらも、教会での話し相手が欲しいが、そのような場面もない▼相談を受けても良い結論を示すことはできなかった。無力な時に無力な人と出会う。無力な人が無力な人を励ますという不思議な図式。いつの間にか、元氣になっている相手と自分に気づく。それは、答えを得た喜びや満足感ではなく、悩みや苦しみを共感、共有した喜びである。二人の間に在る「力」に気づいた喜びでもある▼司祭の役割、教会の役割は何であるか。それは「共に在る方」と共にある喜びを、共に味わうことではないだろうか。それが、これからの教会の姿であるように思える。 (Y)